

報告

日中の精製度の高いモグサの比較調査に関する考察

高橋大希

東京衛生学園専門学校実験部

【要旨】

【はじめに】

現在中国で製造されているモグサは、近年の技術の進歩もあって、石臼を使用せずに製造されているが、見た目が、精製度の高い日本のモグサに非常に近いものが存在する。そこで、日本で製造した精製度の高いモグサ（日本製）と、中国で製造した精製度の高いモグサ（中国製）の違いについて、本校の学生の協力を得て比較をした。

【対象と方法】

2012年2月～3月に東京衛生学園専門学校の学生165名を対象に、2種類のモグサ（日本のA社が製造した最高級モグサと中国のB社が製造した最高級モグサを比較してもらった。比較はクラスごとに行い、学生には2種類のモグサの比較とだけ告知した。その後、「匂い・見た目について」「艾炷の作成について」「艾炷の点火について」「その他・感想」に関する全11問の質問用紙に回答してもらい、回収、集計・分析した。

【結果】

日本製を選んだ割合が多かった質問としては、「色が綺麗（淡黄白色）なのはどちらですか」65%（108人）、「夾雑物が入っていないのはどちらですか」85%（141人）、「途中消えやすいのはどちらで作成した艾炷ですか」69%（111人）であった。

【考察】

モグサの2種類の違いを学生の約7割がわかっていると思われる。しかし、モグサの色、夾雑物の有無、香り、繊維の細かさ、手触りといった比較において、はりきゅう理論の教科書で言われている良質艾と粗悪艾の比較が、共に精製度の高いモグサの場合に、基準が存在していないことに気が付いた。今後のモグサの研究調査においては、精製度の違いを比較するための基準が必要となるだろう。

【結語】

精製度が高いモグサ同士でも、比較した場合に、その内容によって差が生じることは、今後、継続的にモグサの精製度を比較調査する上での資料となりうるだろう。

【はじめに】

お灸と聞くと、熱い、痕がつくといったマイナスイメージが先行しているが、美容分野での手段の一つに鍼灸が用いられていることもあり、灸治療が普及し始めている。書店では、自分自身でお灸をする為の、所謂セルフ灸の書籍も目に留まる。また、艾製造メーカーでもその為の商品を多く製造している。鍼灸の啓蒙・普及を考えると非常に喜ばしいことではあるが、ここで用いられるお灸とは、間接灸と呼ばれる艾が皮膚には直接接触しないタイプである。間接灸であることから、熱くない、痕がつかないことが、一般の方々に受け入れられている理由であることは理解できるが、臨床現場では、当然、直接灸の必要とされる場面も多く、きゅう師にとって、直接灸に用いられる艾の重要性が高いことは言うまでもない。

東京衛生学園専門学校では、直接灸である透熱灸の技術習得を目的に、入学当初から、技量の向上に努めている。散り艾を直径3mm程度の太さの紙縫り状にし(長さは散り艾の量による)、米粒大程度の円錐形の艾炷を、利き手(鍼を持つ手)とは反対の手の母指と示指で捻り出し、利き手の母指と示指で、紙縫り状の散り艾の円錐状になった先端(艾炷)を千切り、目的の場所に置く。その後、利き手の示指と中指の間に挟んだ火のついた線香で、艾炷の先端に点火する。ここまでの基本的な動作に費やす時間は、1年生約30名に対して教員が2名の体制で指導が行われ、90分の授業2回で終わることができる。その後は、3年間の実技授業や、定期的に行われる試験内容に応じて、技量を上げていくことを目的とする。基本的な練習は、市販のペーパータオルを適当なサイズにカットしたものに、縦線20本と、交叉するように横線5本を引くことで出来る交点100箇所(箇所)に施灸することとなる。ペーパータオルへの施灸なので、艾炷の硬さや大きさにより、焼け跡や穴ができてしまうが、学年が上がるごとにそれらは少なくなり、3年生では穴も作らず7分程度で施灸を完了する学生もいる。現在のカリキュラムでは、このペーパータオルによる施灸は、入学後、基本的な動作を覚える為の90分授業2回を終えた後から開

始され、同時に1週間に2枚(計200枚)の提出が宿題となる。また、夏、冬、春の長期休みでは20枚から30枚以上が宿題として提示されることもあり、宿題として提出する為に施灸した枚数だけでも、1年間で15000枚を超える。

このように、3年間で数万枚という艾炷を捻る本校において、散り艾の選別は重要であり、国産の良質透熱灸用艾を用いている。艾の製造工程には、蓬の採取、天日乾燥、加熱乾燥、裁断、石臼、篩、精製などの作業工程がある。この中でも、石臼による工程は重要で、乾燥ヨモギを必要部分と不要部分に分離するために行われる。この工程に掛かる時間と、石臼の種類(目の違い)で、艾に蓬の茎や葉の混入などが影響し、間接灸に用いられる艾から、混合物の無い精製の高い艾までが製造されることになる。しかし、近年中国で製造されている艾に、一見、精製の高い日本の艾に似ているものが存在し、しかし、それらは石臼を使用せずに製造されていることがわかっている。

そこで、日本で製造した精製の高いモグサ(以下日本製)と、中国で製造した精製の高いモグサ(以下中国製)の違いについて、本校の学生の協力を得て比較を行い、双方の艾の違いを学生がどの程度見分けがつくのかを調査した。

【対象】

2012年2月～3月に東京衛生学園専門学校東洋医療総合学科の学生165名(1年生昼部26名、夜部30名、2年生昼部29名、夜部26名、3年生昼部29名、夜部25名、19～60歳、平均29.9歳)を対象とした。

対象時の学年は、1週間に2枚提出が求められた現在のカリキュラムと厳密に同じではないが、夏、冬、春の長期休みに各30枚以上、また授業の進行においての定期的な宿題の提出があり、授業中の練習や、宿題の基準に満たないものを合わせると、3年間での枚数は、最低でも1年間に1万枚は練習している計算になる。つまり、調査時の1年生(昼部、夜部共に)で1万枚、2年生(昼部、夜部共に)で2万枚、3年生(昼部、夜部共に)で3万枚の施灸経験を有していることになる。

【方法】

2種類のモグサ（日本のA社の最高級モグサと中国のB社の最高級モグサで製造されたもの）を入れた紙コップ（柄ありと白）を比較しながら、アンケートの質問に二者択一で答えたものを回収し、集計・分析を行った。また、その他として自由記載によるコメントも頂いた。

比較方法は、東京衛生学園専門学校実習室においてクラスごとに行い、1つのベッドを机として利用し、2人着席し、一人に1セット（それぞれの艾を入れた紙コップを1つずつ。色の違う2種類＜柄ありと白＞を使用）。艾は紙コップの底辺が見えなくなる程度の量を入れた。実習室はベッドが縦に5台ずつ3列に並んでおり（合計6列）、列ごとに紙コップの色と艾の種類を入れ替えて、隣同士が比較できないような工夫をした。また、比較中の会話は禁止とし、学生には『授業で使用しているモグサと中国製のモグサの比較』とだけ告知した。

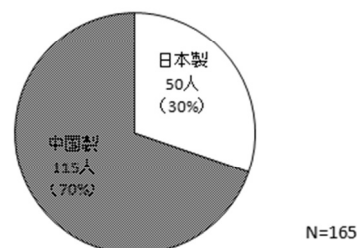
※アンケート用紙参照

【結果】

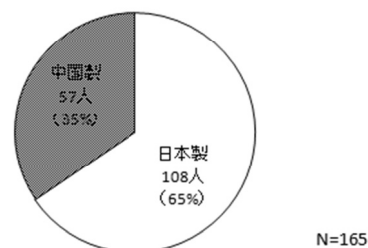
165名全員回答で、日本製を選んだ割合が多かった質問としては、「2.色が綺麗（淡黄白色）なのはどちらですか」108人（65%）（以下、示す順番は実数（%））「3.夾雑物が入っていないのはどちらですか」141人（85%）、「9.途中消えやすいのはどちらで作成した艾炷ですか」111人（69%）、「自分で購入して使用したいのはどちらです」86人（52%）、「値段が高いのはどちらだと思いますか」99人（60%）の5つであり、中国製を選んだ割合が多かった質問としては、「1.良い香り（芳香）のする方はどちらですか」115人（70%）、「4.繊維が細かく見える艾は、どちらですか」126人（76%）、「5.手触りが良いのはどちらですか」114人（69%）、「6.紙縫りが作成しやすいのはどちらですか」103人（62%）、「7.艾炷を作りやすいのはどちらですか」97人（59%）、「8.点火しやすいのはどちらで作成した艾炷ですか」99人（60%）の6つとなったとなった。

※一部の質問に対して無回答があった為、総数が異なっているものがある。

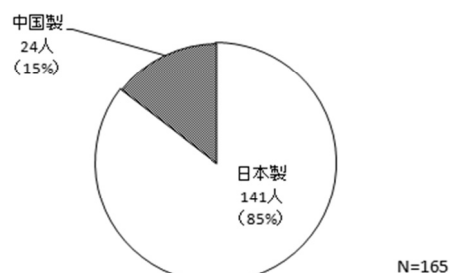
問1. 良い香りの艾



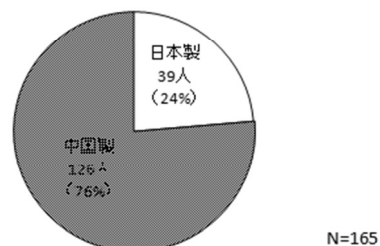
問2. 色が綺麗(淡黄白色)な艾



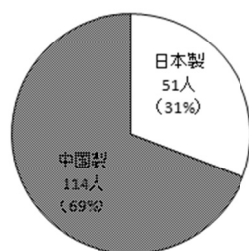
問3. 夾雑物が入っていない艾



問4. 繊維の細く見える艾

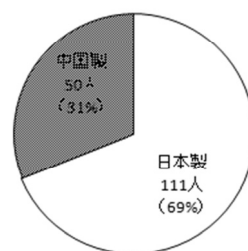


問5. 手触りが良い艾



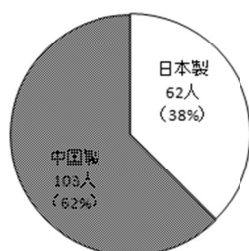
N=165

問9. 途中消えやすい艾



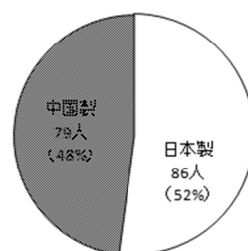
N=161

問6. 紙縫りが作成しやすい艾



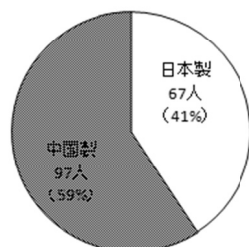
N=165

問10. 自分で購入したい艾



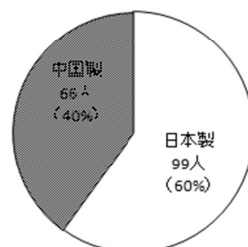
N=165

問7. 艾炷を作りやすい艾



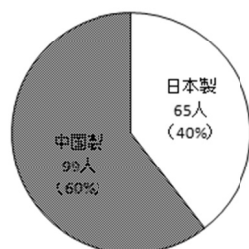
N=164

問11. 値段が高い艾



N=165

問8. 点火のしやすい艾



N=164

【考察】

質問1の『良い香り(芳香)』について、中国製を115人(70%)が良い香りとして選択した。日本製を選択したのは、それに対して半分以下の50人(30%)であった。『はりきゅう理論¹⁾』では、臭いについて、良質モグサは芳香、粗悪モグサは青臭さと区別している。粗悪モグサとは、精製度が低いモグサのことを言っており、蓬の葉や茎などが混入されている為に青臭さが際立つ。しかし、今回のような精製度の高く、『はりきゅう理論¹⁾』

でいう良い質モグサ) 酷似したモグサの比較においては、芳香という表現での区別が付きにくい可能性がある。本アンケートについて自由記載してくれた学生が、165 名中 67 名 (41%) いたが、その内 24 名が香りについての記載があり、その中でも『香りが強い』、もしくは『きつい』との表現を 6 名がしており、その中でも 1 名は『好みの香り』と記載してあった。そして、学年別の比較を見てみると、昼夜共に 1 年生と他の学年との差が大きい。授業において良質モグサと粗悪モグサを実際に手にして比較することは、本校の 3 年間の授業の 1 年生の実技授業においてのみであり、それ以外は別々に扱われる。座学においては 3 年生の国家試験受験前に再確認するだけであることから、実際の臭いにおける印象や記憶が強いのは 1 年生だけである。これらのことを考慮しても、精製度の高いモグサ同士でこのような結果になったことは、臭いにおいて明確な差が生じる要素があると考えられる。質問 2 の『色が綺麗 (淡黄白色) なのはどちらですか?』については、108 人 (65%) が日本製を選択した。質問 1 の『芳香』の表現同様に、こちらの質問も『はりきゅう理論¹⁾』から引用して、良質、つまり精製度の高いモグサを『淡黄白色』とする表現を用いた。この良質モグサの淡黄白色は、粗悪モグサの黒褐色と比較されている。3 年間の授業において精製度の違うモグサによる灸術を紹介しているが、その際で用いられているモグサの色の違いは一目瞭然である。よって、今回のような精製度の高いモグサ同士の比較は、質問 1 同様に難しかったのではないかと考えられたが、全体結果では、日本製を選択した人数は、中国製を選択した 57 人 (35%) の倍近い 108 人 (65%) となり、双方における比較の要素が明確であったことが考えられる。クラス比較では、夜 2 年だけが中国製のほうが日本製を上回る結果となっている。当初、調査上の間違いも考えたが、他の質問項目での双方の比較を見てみると目立った差がないことからそれは考えにくい。また、このクラスだけが他の 5 クラスとモグサの色を区別する基準がずれているとも考えにくい。今回使用した双方のモグサは、袋に入った状態から無作為に一握り抽出し、それを紙コップに小分

けている。日本におけるモグサの製造過程を考えると、商品としてのモグサの一部に精製過程の低いものが混入されることは考えられないが、中国製を選んだ人数が、日本製を選んだ 8 人 (28%) より倍以上多い 21 人 (72%) から、使用したモグサの製造及び商品になるまでの過程に何等かの原因があるのではないかと考えられる。

次の質問 3 の『夾雑物が入っていないのはどちらですか?』は 141 人 (85%) が日本製を選択した。質問項目全 11 の中で、日本製と中国製の差が最もはっきりしたのが、この質問 3 である。この結果から、見た目での夾雑物の有無が明確であることがわかるが、これにもも製造過程の問題が大きく関係していると考えられる。『はりきゅう理論¹⁾』での比較の表現では、不純物が多いか少ないかで比較している。これは、粗悪モグサには蓬の茎などの混入があることが想像つくが、今回のような精製度の高いモグサの比較においては茎などの不純物の混入はほとんどない。しかし、このような結果になったことは、モグサに含まれていた“ゴマ”の有無が関係していると思われる。ゴマとは、モグサ業界の用語で、モグサの精製過程において葉が裁断されて粒状態になったものを言う。精製度の高いモグサの中に含まれると、淡黄白色のモグサの中に、その名の通り黒いゴマのように見えることから呼ばれている。このゴマは、モグサの精製過程における唐箕の精製度合いに関係していると言われている。唐箕の精製度合いには、その前段階において蓬をモグサ (毛茸と腺毛) と葉に分離させることが重要であり、そこには石臼の使用 (臼挽き) が影響してくること想像できる。実は今回使用した日本製と中国製の大きな違いの 1 つに臼挽きの有無がある。中国製は製造工程において石臼を使用せずに製造されており、日本製は石臼を使用して製造されている。この製造方法の違いが、モグサの見た目に大きな差を生んでいると考えることができるだろう。

質問 4 『繊維が細かく見える艾は、どちらですか?』では、全体で中国製 126 人 (76%)、質問 5 の『手触りが良いのはどちらですか?』でも全体で中国製 114 人 (69%) の結果になり、全体及びクラスごとの比較においてすべて中国製のほうが

多い結果となった。これらも製造過程が直接結果に結びついていると思われる。個人でモグサを作る際に、石臼の代わりにミキサーなどで蓬の細断を代用することが見受けられる。この場合、モグサの繊維はバラバラに細断される。つまり、石臼を用いたものよりも繊維の形状をなしておらず、細かくなってしまうので、単純な手触りだけなら見た目と比例するような結果になることが考えられる。よって、質問4『繊維が細かく見える艾は、どちらですか?』が全体結果において、日本製に比べて倍以上の人が中国製のほうが、繊維が細く見えると選択しているのも当然と考えられる。しかし、質問5の『手触りが良いのはどちらですか?』では、全体結果では中国製を選択しているものの、その差はあまり大きくない。双方のモグサを肉眼で比較した結果、圧倒的に中国製のほうが繊維が細く見えているのに、手触りという感覚で比較した場合には大きな差になっていないことは、視覚に比べ触覚のほうが個人差は大きいことの説明にもなり、昼夜の学年、クラスによっても差にバラつきがあるのも感覚的なもの(触覚)の結果ではないだろうか。

質問6の『紙縫りが作成しやすいのはどちらですか?』では、103人(62%)と中国製を選択したほうが多く、質問7の『艾炷を作りやすいのはどちらですか?』では、97人(59%)とこちらも中国製を選択したほうが多い結果になった。クラスによる比較でも、質問6では6クラス中5クラスが中国製のほうが紙縫りを作成しやすいと答えている。全体結果からは中国製のほうが、紙縫りも艾炷も作成しやすいということがわかる。本校における施灸技術の習得は、市販のペーパータオルを施灸練習用の竹の上に乘せ、ペーパータオルに施灸していく。点火した際に、ペーパータオルに艾炷の燃焼による穴が開かないことが、施灸技術向上の条件の1つになっており、その爲には、散り艾をできるだけ圧縮せずに、紙縫りと艾炷を作成する技術が求められる。これらの技術は、学年が上がるほどに向上していくことが、指導経験上わかっている。質問6の『紙縫りが作成しやすいのはどちらですか?』を学年ごとに見てみると、夜3年生以外は学年が上がることに中国製と

日本製の比較が明確になっている傾向があるように思えるが、質問7の『艾炷を作りやすいのはどちらですか?』に至っては、クラスことにまったくバラバラの結果となっている。施灸の指導方法は基本的に学年毎に変わっていないことから、紙縫り及び艾炷の作製ということだけ特化すると、中国製と日本製では本校の学生の技術では、明確な差がないのではないかと考えられる。

質問8の『点火しやすいのはどちらで作成した艾炷ですか?』では、全体結果では中国製99人(60%)、6クラス中5クラスが中国製を選んでおり、質問9の『途中消えやすいのはどちらで作成した艾炷ですか?』では、111人(69%)が日本製を選ぶという結果になった。双方の結果から、よく燃えるのは中国製と考えられる。具体的には、中国製は点火しやすく途中消えないとも言え、日本製は点火しにくく途中消えしやすいとも言える。

最後に、質問10『自分で購入して使用したいのはどちらですか?』、質問11『値段が高いのはどちらだと思いますか?』だが、これは普段の施灸練習において使用しているモグサが、日本産の精製度の高いモグサであることを知っている学生が、それにどの程度の魅力を感じているのかも期待しての項目となっている。質問10『自分で購入して使用したいのはどちらですか?』は全体結果として、日本製86人(52%)、中国製79人(48%)とほぼ半分に分かれる結果となった。クラス別の結果を見ても、バラバラとなっている。質問11『値段が高いのはどちらだと思いますか?』においても、全体結果として日本製99人(60%)、中国製66人(40%)と若干日本製を選んだ学生が多いが、大差はない。これらから、本校の学生にとって日本製と中国製の双方に、決定的な差は無いと感じていると考えられる。

本アンケートは、精製度の高い日本製と中国製のモグサの違いを学生が比較した結果であるが、アンケートを実施してみて、多くの問題点が浮き彫りになった。

その中心が比較内容の問題である。

『はりきゅう理論¹⁾』には、モグサの品質として、「モグサの品質は産地、製造方法によって異なる

が、芳香の良い、熱刺激の緩和なものが良質である。しかし、間接灸用モグサなどには熱刺激の強い粗悪なものがよく用いられるので、用途に合わせて選ぶとよい。」として、おおまかな鑑別の要点として以下のような表による記載がある。

良 質	粗 悪
芳 香	青臭い
手触りが良く柔らかい	手触りが悪く固い
淡黄白色	黒褐色
繊維が細かい	繊維が粗い
不純物が少ない	不純物が多い
燃焼時、煙と灰が少ない	燃焼時、煙と灰が多い
燃焼時の熱感が緩和	燃焼時の熱感が強い

上記の表は艾の鑑別であり、良質艾と粗悪艾の比較とある。また、良質モグサと粗悪モグサは、直接灸用モグサと間接灸用モグサとして使いわけることが説明されている。このアンケートを作成する際にも上記の艾の鑑別を参考にしたことは先に述べた。

直接灸に用いられる良質艾と間接灸などに用いられることの多い粗悪艾では、その精製過程の差から各項目が反対の内容になっている。また、中国では現在、直接灸による施灸は少ないと言われており、棒灸や灸頭鍼に用いられているモグサは粗悪なものが多い。この2点が日本におけるモグサにの常識となつていられることから、今回のアンケート内容も、反対の結果を想定した質問項目として設定した。しかし、使用したモグサは日本で製造した精製度の高いモグサと、中国で製造した精製度の高いモグサの爲、それを踏まえての質問項目にする必要があった。日本におけるモグサの常識が指導者側の常識にもなっている為に、回答者である学生もこの影響を全く受けていないとはいきれない。これらのことから、明らかに精製度の違うモグサ同士を比較することはできても、精製度の高いモグサ同士を比較する際の明確な基準が存在していないことに気づく。

つまり、質問1の『良い香り（芳香）』、つまり嗅覚による比較にはその明確な基準が存在しない。

これらのことに気づいたのは、アンケート実施後である。今回のアンケート調査には、学校内の実習室を利用したが、本校の実習室は2教室あるが、1つは鍼灸専用の実技室、もう一つはマッサージ専用の実技室である。今回のアンケートはこの双方の教室を使用した。ここで問題となるのが、鍼灸専用の実技室には長年の施灸練習の結果、室内には灸の臭いが染みついており、マッサージの実技室にはマッサージオイルやパウダーの臭いが染み付いている。比較対象にばかり気を使い環境への配慮が不十分であった。これらが質問1の『良い香り（芳香）』に全く影響していないとはいい切れない。とくに、今回のような精製度の高い艾（上質艾）においては、芳香と表現されているように、その臭いは強くなく、少量での比較は困難を要する。その割に、一度使用した紙コップには艾の臭いが染み付く爲に再利用が出来ない。今回は安価な紙コップだった爲に、クラスごとに新品を使用した。これらの工夫も当然必要となる。自由記載において、臭いに関するコメントがいくつかあったが、注目すべきものとして、点火時の煙の臭いについて4名の感想があった。3年間で5万壮近い施灸を実施する本校において、施灸時に感じる臭いは、艾の芳香ではなく、煙（艾と線香の燃焼時に発する）の臭いである。考えてみれば、コーヒー豆にしても茶葉にしても、見た目での見分けは難しいと思われる。使用した時の香りを楽しむことや比較できることから、精製度の高いモグサにおいては燃焼時（施灸時）の煙の臭いでの鑑別や比較の可能性も今後参考にすることができるとはならないだろうか。

次の質問2の『色が綺麗（淡黄白色）なのはどちらですか？』、質問3の『夾雑物が入っていないのはどちらですか？』、質問4『繊維が細かく見える艾は、どちらですか？』の視覚による比較においても明確な比較基準がない。今回の比較に使用したモグサの量は、紙コップの底辺が見えなくなる程度の量（目分量）であり、何等かの基準を設ける必要があった。コップの底であること（距離間）、実習室での蛍光灯による光の加減も考慮する必要があった。実際、舌診の比較実験などには、これらの条件を合わせることで視覚的に比較でき

ることも示されている。

質問5の『手触りが良いのはどちらですか?』、質問6の『紙縫りが作成しやすいのはどちらですか?』、質問7の『艾炷を作りやすいのはどちらですか?』、質問8の『点火しやすいのはどちらで作成した艾炷ですか?』、質問9の『途中消えやすいのはどちらで作成した艾炷ですか?』においては、特に比較基準の重要性を感じる。なぜなら、今回のアンケート調査から得られた結果が、臨床での施灸における治療効果との関係性を証明するものが何も無いからである。質問8の『点火しやすいのはどちらで作成した艾炷ですか?』、質問9の『途中消えやすいのはどちらで作成した艾炷ですか?』結果から、よく燃えるのは中国製であり、具体的には、中国製は点火しやすく途中消えしない、日本製は点火しにくく途中消えしやすいと考察したが、先行研究として松本・形井の報告³⁾では、実際に施灸した感想として、「熱の通りがよい」では、日本産を選んだ方が多く、「熱が強い」では外国製(中国製)のほうが多く、「心地よかった」を選んだのも日本製の多かったと報告がある。これらから考えられるのは、点火のしやすさと、途中消えの有無が、実際の臨床において本当に理想的なモグサであるのかは別問題ではないかということである。治療効果が認められ2000年以上も使用されてきたモグサだが、歴史的にも艾炷のサイズはどんどん小さくなってきており、効果はあるが点火しにくいからこそ技術を磨いて対応してきたと考えてみると、施灸に適したモグサとはどのようなものなのかといった基準が、ここでも確立されていないことに気づく。国内でモグサの製造を行っている亀屋佐京商店では、日本産ヨモギと中国産ヨモギでモグサを製造した場合、日本産のヨモギのほうがキレがあると教えて頂いた。キレとは、艾から艾炷を作成する際の作りやすさのことを言う。また、山内らの石臼とミキサーによるモグサの粉碎工程の違いによる報告²⁾によると、学生へのアンケート結果で90%以上の学生が双方の違いを認め、艾炷のひねりやすさにおいても石臼を使用して製造したモグサのほうが良いと回答した割合が多いと報告がある。今回使用しているモグサは、日本産のヨモギを使用した日本製の

モグサと、中国産のヨモギを使用した中国製との比較であるが、ヨモギの生産地によって製造されるモグサに差が生じ、製造工程の違いによっても製造されたモグサに違いがあるとするならば、今後は紙縫りや艾炷の作製を比較する際には、これらのことも考慮した比較が重要となるだろう。

以上、全ての質問項目から、現在モグサの種類を比較する際の明確な基準が無いことに気がついた。

今回の比較に際して参考とした『はりきゅう理論』¹⁾で用いられている良質艾と粗悪艾という表現だが、どのような目的で使用されたか調べる術はない。『はりきゅう理論』¹⁾は2002年に初版が発行された教科書だが、その前に使用されていた『鍼灸理論』⁴⁾は1985年に初版が発行されており、この中でも、モグサの品質と良否鑑別として、良質艾と粗悪艾と記されている。鍼灸理論の参考文献がいくつか挙げられているが、1982年発行の『鍼灸理論(オリエンス研究会編)』⁵⁾では、良質艾と悪質艾は、1959年に初版発行の『鍼灸の科学』⁶⁾も参考文献に挙げられ、今回確認できた1979年発行の第2版では艾の良否の鑑別として、良、否と分類されている。1976年に初版発行の『鍼灸学原論』⁷⁾、今回確認できたのは1977年の第2版だが、こちらでは、モグサの種類を大別して精選艾と温灸艾と分けている。モグサや艾葉は、漢方薬としても使用されており、灸治療のみに使用されているものではない。しかし、灸治療に用いられているものと、その他で使用されているものを比較した際には、良質艾と粗悪艾と表現され、香りや手触りなどの見た目のわかりやすいところで分類されたのだろうが、もともと、モグサの製造販売をしているところでは、商品に『粗悪』の文字を使用することも考えにくい。モグサは精製度の違いによって多くの種類があり、灸療法の種類も数多く存在し、目的に応じて使い分けされている。しかし、現在の臨床現場では、教科書の影響もあってか、良質艾と粗悪艾の単語で使用されているものも耳にする。今後は、精製度の違いに基準をおくことで、まずは名称から見直していくことが、モグサに関わる研究において重要となると思われる。本調査内容を多くの方の今後の研究の

参考資料として生かして頂くことを心から望む。

【結語】

日本製と中国製の共に精製度の高いモグサを比較・調査したことで、その差を明確にする爲の基準となるものが存在していないことに気づいた。しかし、それでも日本製と中国製とで差が見られることは、今後の研究や調査において、アンケート内容として意義のあるものと考ええる。

【謝辞】

本調査を実施するにあたり、中国製モグサの提供、調査内容に関して、筑波技術大学の形井秀一先生には多くのアドバイスを頂きました。また、調査及びこのような形で報告できるにあたり、ご協力頂きました東京衛生学園専門学校の多くの方々に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 教科書執筆小委員会編. はりきゅう理論. 医道の日本社. 2002:22.
- 2) 山内晶子、他 神奈川衛生学園専門学校. 艾用石臼の試作と粉碎工程の違いによる艾の比較検討. 全日本鍼灸学会学術大会抄録集. 2013:159.
- 3) 松本毅、形井秀一. 国内産と外国産モグサの違いに関するアンケート調査—艾しゅの作製と点火後の感想—. 全日本鍼灸学会学術大会抄録集. 2013:159.
- 4) 教科書執筆小委員会編. 鍼灸理論. 医道の日本社. 1985:16.
- 5) オリエンス研究会編. 鍼灸理論. 岡山ライトハウス. 1982:60 - 61.
- 6) 芹澤勝助. 鍼灸の科学 理論篇. 医歯薬出版株式会社. 1979:16.
- 7) 木下晴都. 鍼灸学原論 第二版. 医道の日本社. 1977:240.

艾の品質に関するアンケート

(1 ・ 2 ・ 3) 年 (男 ・ 女) 年齢 () 歳

紙コップに入った2種類の艾(紙コップ柄あり・白)について、以下の質問にお答え下さい。
尚、このアンケートが皆さんの成績に影響することは一切ありません。

匂い・見た目について

1. 良い香り(芳香)のする方はどちらですか？
柄あり ・ 白
2. 色が綺麗(淡黄白色)なのはどちらですか？
柄あり ・ 白
3. 夾雑物が入っていないのはどちらですか？
柄あり ・ 白
4. 繊維が細かく見える艾は、どちらですか？
柄あり ・ 白

艾炷の作成について

5. 手触りが良いのはどちらですか？
柄あり ・ 白
6. 紙縊りが作成しやすいのはどちらですか？
柄あり ・ 白
7. 艾炷を作りやすいのはどちらですか？
柄あり ・ 白

艾炷の点火について

8. 点火しやすいのはどちらで作成した艾炷ですか？
柄あり ・ 白
9. 途中消えやすいのはどちらで作成した艾炷ですか？
柄あり ・ 白

その他・感想

10. 自分で購入して使用したいのはどちらですか？
柄あり ・ 白
11. 値段が高いのはどちらだと思いますか？
柄あり ・ 白

※2種類の艾(紙コップ柄あり・白)を使用して気付いたことや、感想がありましたらご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。